

3-1 将来都市像

3-2 都市づくりの基本方針

3-3 都市づくりの基本目標

3-4 将来の都市構造

■将来都市像と都市づくりの体系

まちづくりの基本理念

「ひとの元気・地域の元気・まちの元気」

将来都市像

水と緑と歴史がおりなす 笑顔あふれるまち ぎょうだ

【目標年次】 平成 44 年度（平成 25 年度から 20 年間）

【将来人口フレーム】 定住人口 70,000 人

まちづくり人口 83,000 人

都市づくりの基本方針

これまでのまちづくり

人口増を前提に
成長と拡大を
基調とした都市づくり

人口減少
高齢化

これからのまちづくり

水と緑と歴史を活かした
環境負荷の少ない集約連携型の都市づくり

都市づくりの基本目標

前都市計画マスタープランの将来都市像「水と緑が歴史と未来をつなぐまち」を受け継ぎつつ、「暮らしの充実」と「にぎわいの創出」をキーワードとした都市づくりを展開する

水と緑と歴史の継承

暮らしの充実

にぎわいの創出

基本目標

1 行田らしさが
光るまち

基本目標

2 笑顔で暮らす、
住みよいまち

基本目標

3 笑顔あふれ、
にぎわいを生むまち

- 1 美しい水と緑・田園風景が広がる、環境に配慮したまち
- 2 歴史的な街並みや調和のある都市景観が形成され、歴史が息づくまち

- 1 都市拠点の活性化と周辺地域の生活環境の調和がとれたまち
- 2 良好な都市環境が整った交通利便性の高いまち
- 3 子どもからお年寄りまで快適で安全・安心に暮らせるまち

- 1 産業振興により雇用の場が確保され、生き生きと働き暮らせるまち
- 2 市民と来訪者の交流がにぎわいを生み、快適に過ごせるまち
- 3 地域産業が活発な活力のあるまち

基本目標 **4** みんなでつくる協働のまち

市民・民間事業者・行政機関等が相互に連携し、それぞれが主体性を持って活躍できるまち

3-1 将来都市像

1) まちづくりの基本理念

「ひとの元気・地域の元気・まちの元気」

社会情勢の変化や多様化する市民ニーズに対応し、持続的に成長するまちを創造していくためには、まちづくりを構成するすべての要素に“元気”が必要です。3つの“元気”を柱とした基本理念にもとづき、目指すべきまちづくりの方向を市民と行政が共有し、これからのまちづくりを進めていきます。

ひとの“元気”

- 子どもからお年寄りまですべての世代にわたり、市民が心身ともに健やかに、いつまでも元気に暮らせるまちづくりを進めます。
- 「だれでも、いつでも、どこでも」生涯を通して学ぶことができる環境づくりを進め、一人ひとりが持つ豊かな知識や経験を活かし、活躍できるまちづくりを、市民とともに進めます。
- 市民や企業をはじめだれもが協働し、それぞれの役割分担のもとに自らが主体となり、ともに支え合い責任を持って、まちづくりを進めます。

地域の“元気”

- だれもが安心して豊かな生活を送ることができるよう、あらゆる分野において「安全・安心」を基本的な視点としながら、地域全体でともに支え合える思いやりのまちづくりを進めます。

まちの“元気”

- 本市の恵まれた自然環境を貴重な資源として守りはぐくみ、安全で快適な生活が営めるよう、環境に配慮した省資源・循環型社会の構築を図りながら、うるおいのあるまちづくりを進めます。
- 古くから継承されてきた、ここにしかない貴重な歴史文化遺産と豊かな自然を大切に、学び、ふれあい、発信することにより、まちに誇りと自信を持ち、愛する心をはぐくむとともに、豊かな地域資源を活用した集客による交流人口の増加や産業の活性化により、にぎわいと活気あふれるまちづくりを進めます。

2) 将来都市像

水と緑と歴史がおりなす 笑顔あふれるまち ぎょうだ



笑顔あふれるまちとは、住む人も訪れる人も幸せを感じるまちです。そして「住みよく」「暮らしやすい」まちで、誰もが生き活きと楽しく暮らしていることが、訪れる人にとって、最大のおもてなし環境です。

「にぎわいの赤」、「うるおいの青」、「やすらぎ、ぬくもりの緑」の3原色を組み合わせ、行田オンリーワンのまちをつくっていきます。

古代から現代へ人の営みを綿々につなぎ、未来をきりひらくまち、これが行田です。現代を生きる私たちは、まちをつくり、育て、発展させ、未来につなげていきます。

(1) 目標年次と将来人口フレーム

【目標年次】 平成44年度（平成25年度から20年間）

【将来人口フレーム】 定住人口 70,000人（まちづくり人口 83,000人）

（目標年次）

都市計画マスタープランの目標年次は平成44年度（平成25年度から20年間）とします。

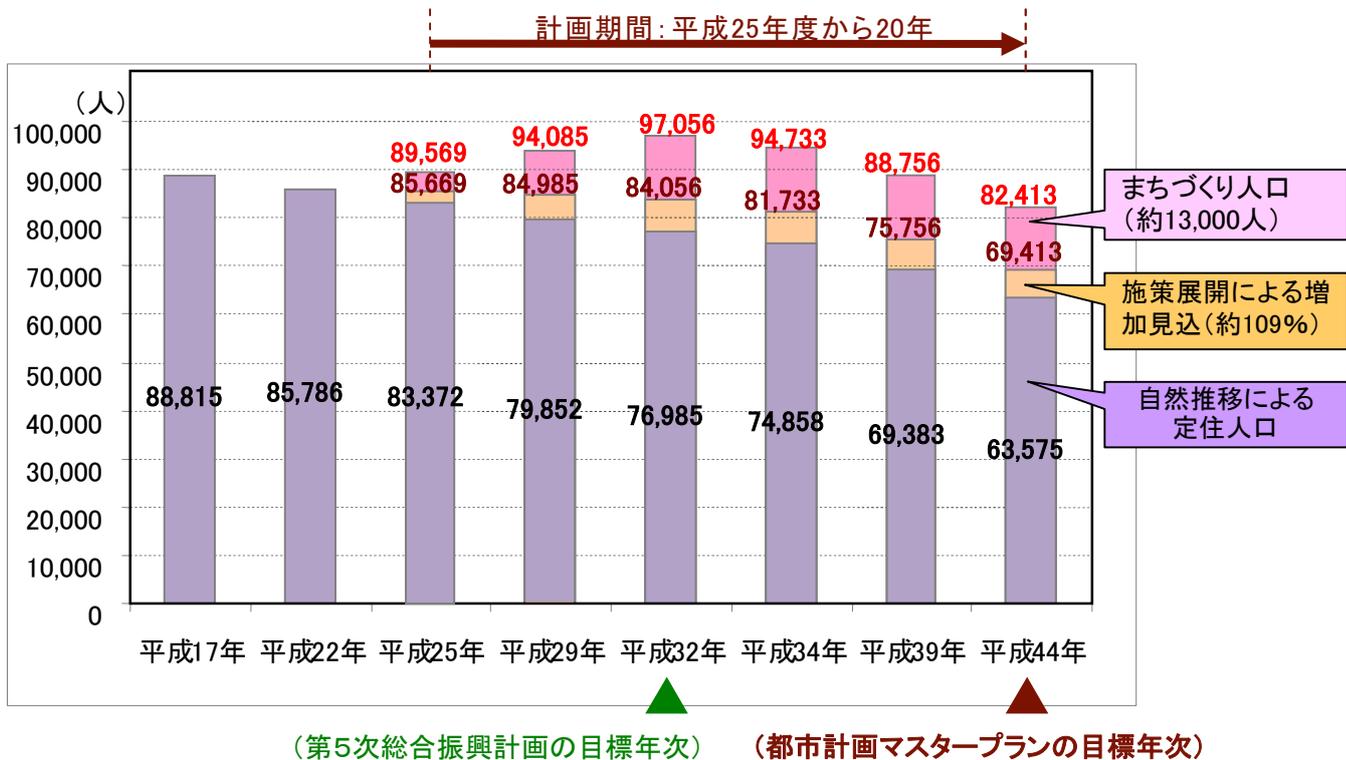
（将来人口フレーム）

全国的な人口減少社会が到来し、本市においても人口減少に歯止めをかけることは最も重要な課題です。近年の人口動向をみると、今後人口を増加させることはきわめて難しい状況にあり、目標年次である平成44年度には現在の人口を大きく下回ることが予想されます。

しかし、目指す将来都市像を実現するためには、一定の人口を維持してまちづくりを進めていくことが不可欠です。

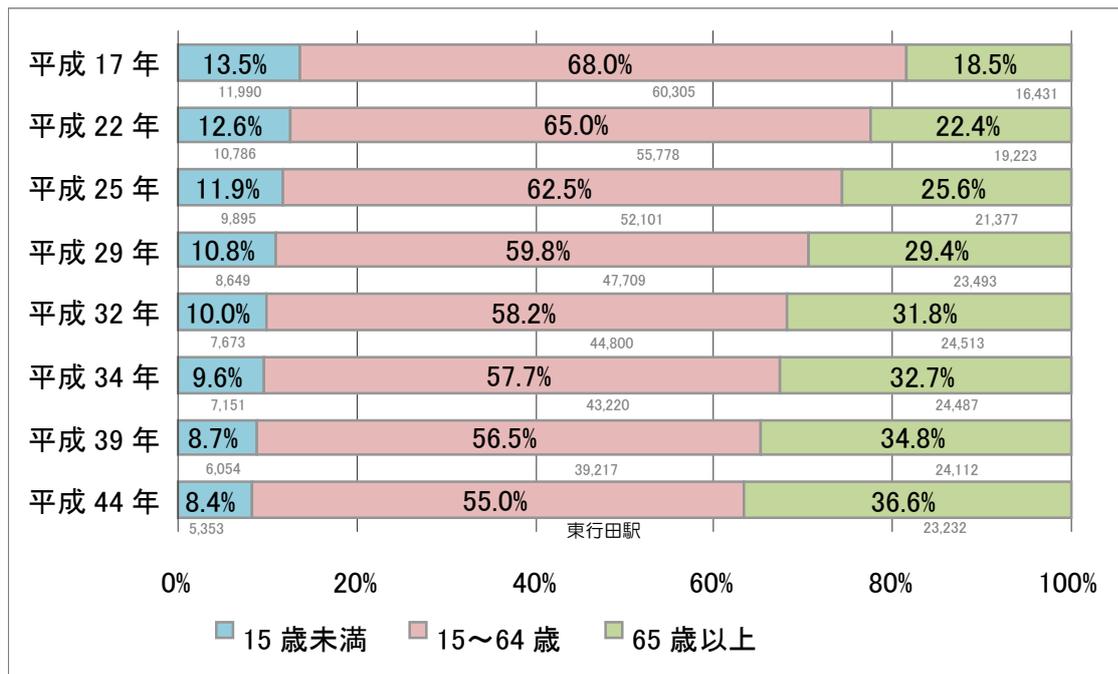
都市計画マスタープランにおいては、様々な施策の展開により人口の転入促進、転出抑制、交流人口の増加を図ることで、『定住人口』70,000人（交流人口を加えた『まちづくり人口』83,000人）を将来人口フレームとします。

■ 計画期間における定住人口の推計と目標人口フレームの設定



※平成22年度国勢調査結果を基に、都市計画マスタープランの目標年次である平成44年度までの定住人口をコーホート変化率法により推計

■ 将来人口・年齢3区分別割合の推移



3-2 都市づくりの基本方針

1) 都市づくりの基本方針

水と緑と歴史を活かした 環境負荷の少ない集約連携型の都市づくり

本市は、中心市街地の活力、住環境の利便性や安全性、公共交通基盤の確保、産業の振興、地域コミュニティの維持、身近な自然環境の保全など、様々な課題を抱えています。

特に本市の人口は、平成12年頃から減少に転じて平成22年には約86,000人となり、本マスタープランの目標年次である20年後の平成44年には約64,000人へと減少し、高齢化率は約37%に達すると推計されます。

また、地球環境問題への関心の高まりとともに、循環型社会の形成や省エネルギー・省資源を目指した活動など、環境負荷の少ない都市への転換が求められています。

そこで、人口減少社会における市民の快適な暮らしの維持、更に魅力ある快適な都市の実現に向けて、これまでの人口増を前提に成長と拡大を基調とした都市づくりから転換し、本市の強みを前面に打ち出した「水と緑と歴史を活かした、環境負荷の少ない集約連携型の都市づくり」を、都市づくりの基本方針とします。

(新たな都市づくりへの転換)

人口減少や少子化・高齢化の進行に伴う社会情勢の変化を背景とした多様な要請に対応するためには、成長・拡大を前提としてきたこれまでの都市計画ではなく、将来の人口フレームにあわせた新たな都市づくりの考え方が重要です。

- 人口減少・超高齢社会にあたっては、必要とされる都市機能を都市拠点（中心市街地など）に集約し、誰もが歩いて暮らせる、安全で暮らしやすいまちづくりを進めるとともに、農村集落地での生活利便性を向上し、これらを結ぶ道路・公共交通ネットワークなどの更なる充実により、各地域が連携した都市づくりを目指します。
- また、都市の経済活動を高めていくためには、地域産業の振興、産業立地を促す環境整備などが重要であり、広域交通網の整備など、他都市との広域連携による都市づくりを目指します。
- さらに、本市の都市・地域づくりの基盤といえる水と緑の環境保全、都市機能の集約化と無秩序な宅地の拡散の抑制、効率的な道路・交通基盤の構築など、環境負荷に配慮した持続可能な都市づくりを目指します。

●様々な課題：中心市街地の活力向上、住環境の利便性と安全性の確保、公共交通基盤の確保、産業の振興、地域コミュニティの維持、身近な自然環境の保全

●予測される人口減少と少子化・高齢化：
20年後には約64,000人、高齢化率は約37%

●社会的な要請：環境負荷の少ない都市への転換

これまでのまちづくり

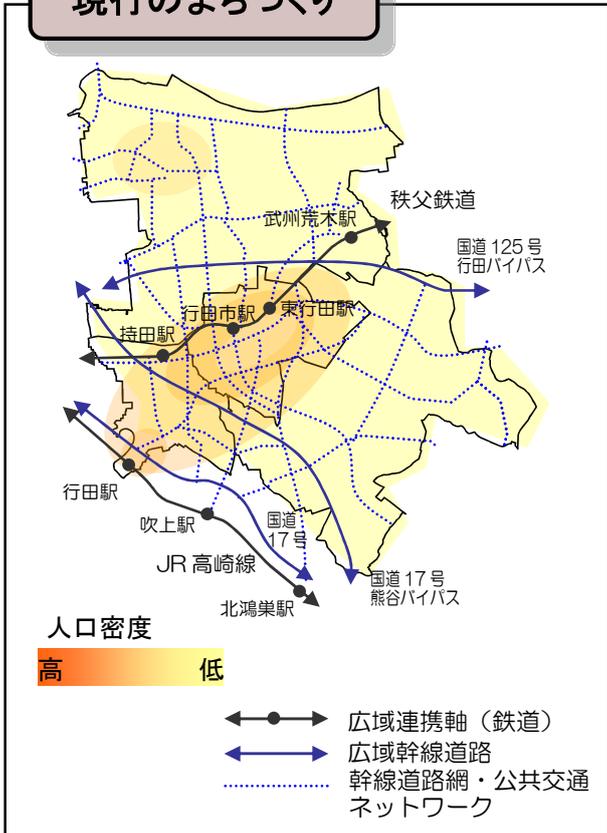
人口増を前提に
成長と拡大を
基調とした
まちづくり

これからのまちづくり

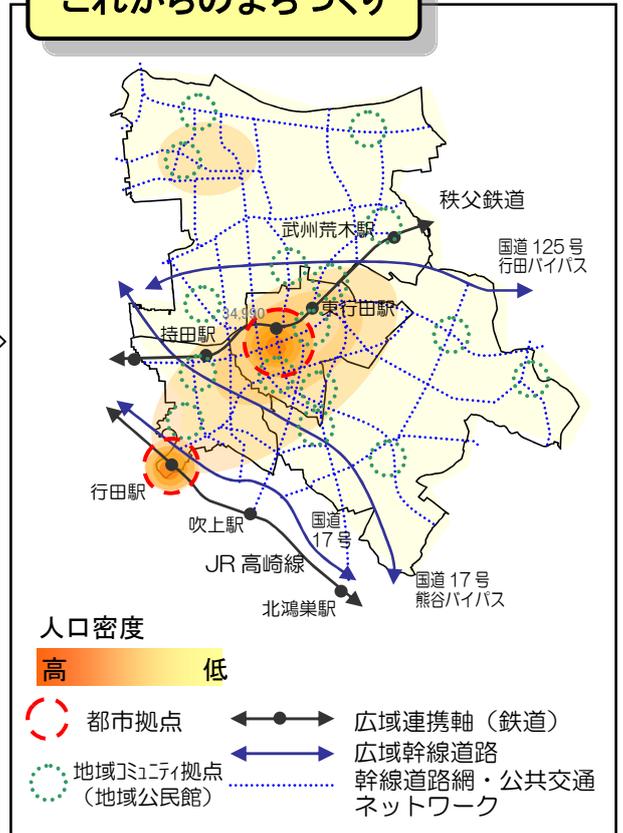
水と緑と歴史を活かした
環境負荷の少ない
集約連携型の都市づくり

【これからの都市構造のイメージ】

現行のまちづくり

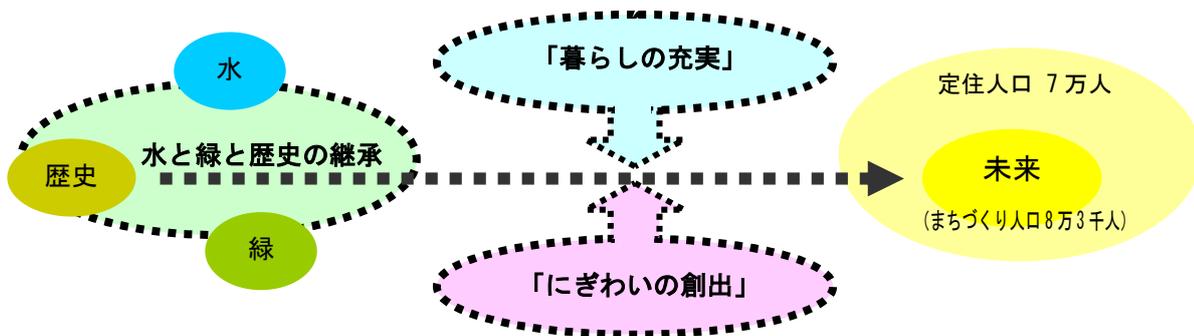


これからのまちづくり



3-3 都市づくりの基本目標

これまでの都市計画マスタープランの将来都市像である「水と緑が歴史と未来をつなぐまち」を受け継ぎながら、そこに「暮らしの充実」と「にぎわいの創出」をキーワードとした具体的な都市づくりの基本目標を定め、「水と緑と歴史を活かした、環境負荷の少ない集約連携型の都市づくり」を展開していきます。



1 行田らしさが光るまち

- ・利根川をはじめとする河川やさきたま古墳公園など、本市特有の自然環境を次世代に継承するため、環境への負荷の軽減を図るとともに、水と緑に囲まれ、都市と自然が共生する、行田特有の暮らしがあるまちづくりを進めます。

2 笑顔で暮らす、住みよいまち

- ・多様な都市機能を都市拠点に集約し、それらと生活の場を公共交通で連携することによって、都市部と農村集落地のそれぞれの生活圏が魅力的で、便利で暮らしやすいまちづくりを進めます。

3 笑顔あふれ、にぎわいを生むまち

- ・都市機能の集約と地域資源の活用、土地利用の見直しにより、農業・商業・工業・観光のあらゆる分野で市民と来訪者の交流の拠点を形成し、にぎわいと活力のあるまちづくりを進めます。

4 みんなでつくる協働のまち

- ・市民、民間事業者、行政機関のそれぞれが、構想段階から事業化段階まで継続して、主体的にまちづくりに関わっていくことができる体制を構築し、協働によるまちづくりを推進します。

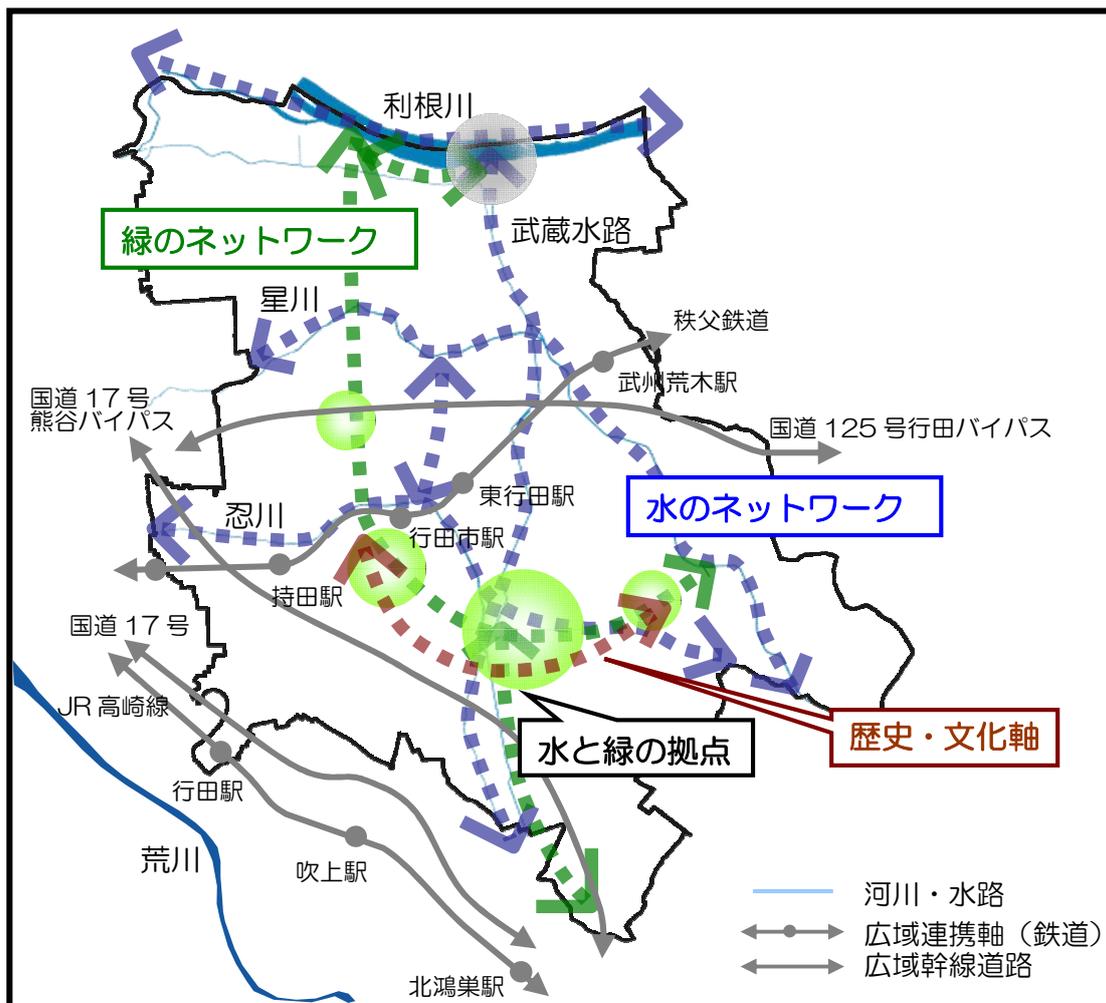
基本目標 1 行田らしさが光るまち —水と緑と歴史の継承—

利根川やさきたま古墳公園など、本市特有の自然環境を次世代に継承するため、環境への負荷の軽減を図るとともに、水と緑に囲まれ、都市と自然が共生する、行田特有の暮らしがあるまちを目指します。

(まちづくりの視点)

- 本市には、利根川をはじめとする河川や水路が幾重にも流れ、市民が身近に感じる憩いの水辺空間が創出されています。
- また、さきたま古墳公園などの緑地には、二酸化炭素の低減対策などの環境保全、身近なレクリエーションの場、防災や景観形成など、多様な機能があります。
- これら本市特有の自然環境を次世代に継承するため、自然を活かした環境と共生する行田らしい水と緑のまちづくりを進めます。

【都市づくりのイメージ図】



目標-1 美しい水と緑、田園風景が広がる、環境に配慮したまち

- ・ 川の再生や緑化の推進により、水資源・生態系に配慮した環境負荷の小さな、人と自然にやさしいまちづくりを進めます。

●自然環境の保全と都市機能の集約による環境負荷の低減

河川や緑地など、水と緑の豊かな自然環境の保全によって、環境への負荷の軽減を図ります。また、自然環境の保全とともに、都市機能の集約化や無秩序な宅地の拡散の抑制、効率的な交通基盤の構築により、自然環境と都市活動とのバランスのとれた、持続可能なまちづくりを進めます。

●身近な緑や河川の保全とふれあい環境の創出

本市には、市街地を囲むように分布する農地及び屋敷林、市域内を流れる河川及び水路、歴史的な公園など、水と緑に恵まれた豊かな自然環境を身近に感じることができます。水城公園やさきたま古墳公園、古代蓮の里などを「緑の拠点」、それらを結ぶ「緑のネットワーク」、利根川などの河川を「水のネットワーク」として位置付け、身近な自然環境の保全と緑化の推進を図るとともに、市民のレクリエーションの多様化に対応した、自然や水とふれあえる場の創出を図ります。

●河川の改良や緑化の推進による防災機能の向上

自然環境を保全する一方で、局地的な豪雨や台風などによる浸水や冠水などの水災害を防ぐため、河川及び水路の改良や、調整池の整備による排水機能の向上を図るとともに、公園・緑地・緑道の適正な配置により、防災機能の向上を図ります。

目標-2 歴史的な街並みや調和のある都市景観が形成され、歴史が息づくまち

- ・ 歴史的な街並み景観、平坦な地形を活かした美しい水環境や自然景観の形成により、歴史と自然が薫るまちづくりを進めます。

●歴史景観と自然景観の保全・活用

本市には、豊かに広がる農地と河川が生み出す水と緑の景観と、さきたま古墳群や忍城址など、歴史を感じることができる景観があります。

本市の特徴である平坦な地形や豊富な水資源などによる、のびやかでやすらぎ感のある風景、便利さや活力・賑わいといった都市的な風景、及び誇れる歴史の風景が調和し、住む人にとっても、訪れる人にとっても、やすらげる景観形成を図ります。

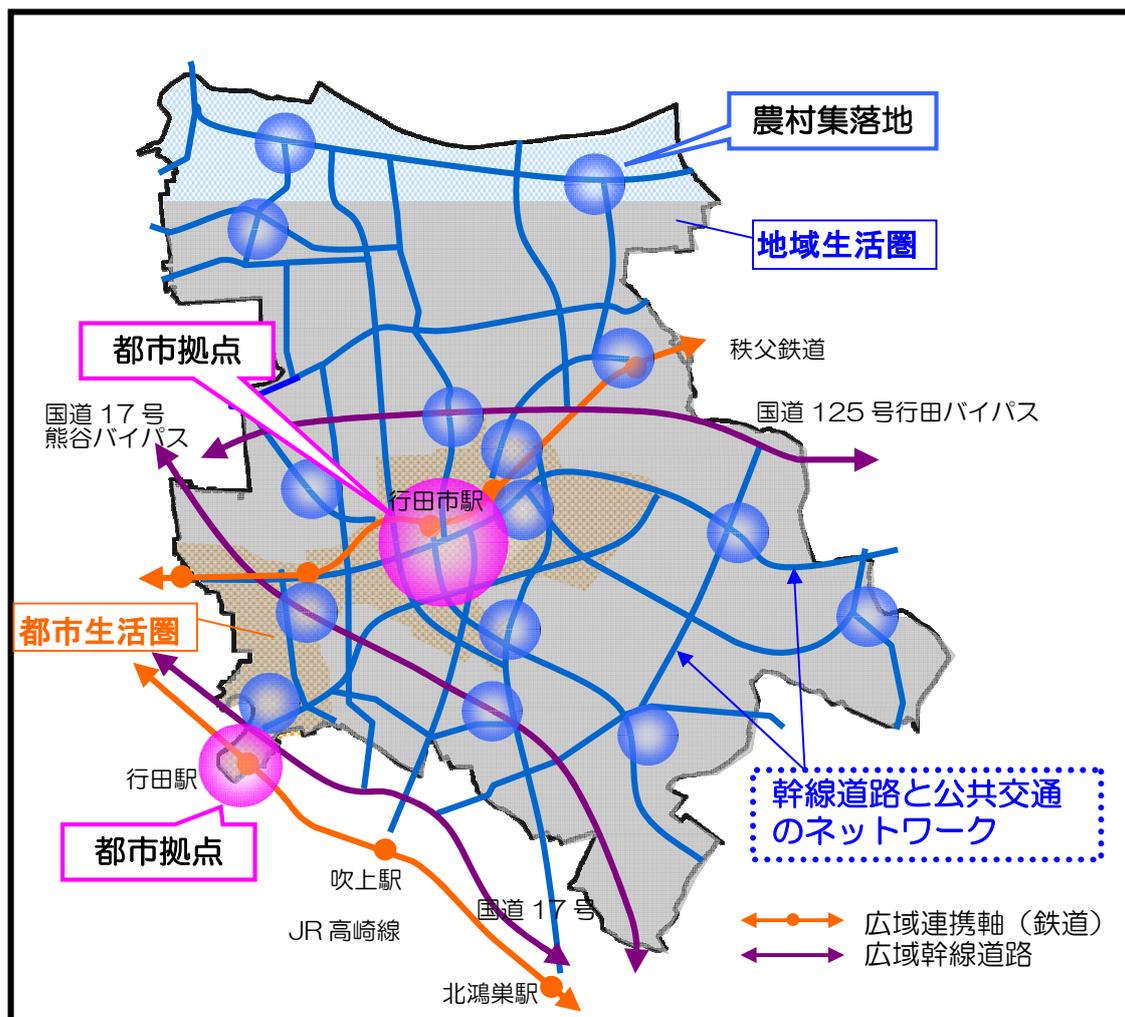
基本目標 2 笑顔で暮らす、住みよいまち —暮らしの充実—

多様な都市機能を都市拠点に集約し、それらと生活の場を公共交通で連携することによって、都市部と農村集落地のそれぞれの生活圏が魅力的で、便利で暮らしやすいまちづくりを進めます。

【まちづくりの視点】

- 中心市街地とJR行田駅周辺の『都市拠点』に多様な都市機能を集約し、あわせて公共交通などのネットワーク機能を強化した、集約連携型の都市構造への転換を進めます。
- 『都市生活圏』では、商業・業務・文化、観光など多様な都市機能を集約した「中心市街地」を核として、歩いて暮らせるまちづくりを進めます。
- 『地域生活圏』では、それぞれの農村集落地の道路や水路などの都市基盤整備を充実し、地域コミュニティの維持と、ゆとりある生活環境の創出を図ります。

【都市づくりのイメージ図】



目標-1 都市拠点の活性化と周辺地域の生活環境の調和がとれたまち

- ・ 商業、業務など多様な都市機能の集約や、まちなか居住の誘導による市街地の活性化を図ります。
- ・ 農村集落地の生活環境の向上を図り、地域間を結ぶ道路・公共交通ネットワークの連携により、相互にバランスのとれたまちづくりを進めます。

●多様な機能を集約した都市拠点の形成

中心市街地には、商店街や秩父鉄道行田市駅、市役所などの公共公益施設、忍城址などの歴史資源、市民の憩いの場である水城公園のほか、商業、医療、福祉、教育など様々な都市機能が集約した都市拠点の形成を図ります。

JR行田駅周辺は、商業施設、子育て支援センターなどの子育て支援施設、行政サービス施設など、生活支援機能の充実を図り、通勤・通学はもとより市内外の交流・交通の要衝となる都市拠点の形成を図ります。

●誰もが歩いて暮らせるまちづくりの推進

「都市拠点」においては、歩いて楽しいまちづくりを進め、中心市街地の回遊性の向上を図ります。

「都市生活圏」においては、鉄道交通の機能強化や駅周辺の交通基盤を充実させるとともに、歩行者の安全性・快適性を重視し、歩いて暮らせるまちづくりを進めます。

都市基盤整備においては、ユニバーサルデザインの導入により、移動の安全性や快適性の向上を図ります。

●農村集落地の生活環境の向上

「地域生活圏」においては、無秩序な宅地の拡散を抑制し、既存の農村集落地周辺における都市基盤整備の充実を図ります。また、生活道路などの道路ネットワークの充実を図るとともに、超高齢社会での移動の容易性や環境負荷の軽減に対応するため、バスなどの公共交通ネットワークを充実し、農村集落地の利便性の向上を図ります。

目標-2 良好な都市環境が整った交通利便性の高いまち

- ・生活道路ネットワークの充実や、自転車・歩行者に快適で安全な環境整備とともに、バス・鉄道により地域間が円滑につながる交通利便性の高いまちづくりを進めます。

●都市拠点と地域間をつなぐ道路・公共交通ネットワークの形成

中心市街地などの都市拠点に都市機能の集約を図るとともに、道路・公共交通の整備を進め、都市拠点とそれぞれの生活圏を公共交通のネットワークで連携した、集約連携型の都市構造への転換を進めます。

●市民生活を支える公共交通の利便性の向上

広域的な都市間連携や交流を促進する広域交通網、市内の移動を円滑にする生活道路など、市民生活を支える道路交通環境の充実を図ります。また、デマンド交通の導入や、鉄道事業者やバス事業者と連携して、輸送力の増強や路線の複線化、駅周辺の交通結節機能を強化するなど、公共交通の利便性の向上を図ります。

●歩行者や自転車の交通環境の安全性の確保

交通利便性の向上を図る一方で、生活道路では、子ども、高齢者及び障がい者の視点で歩行者や自転車の安全対策を再確認し、車両の走行速度の抑制など一体的エリアでの車両の走行速度を抑制するなど、地域の実情に即した安全対策を進めます。

目標-3 子どもからお年寄りまで快適で安全・安心に暮らせるまち

- ・地域間交流や身近に買い物ができる施設・公園等の整備により、子どもから高齢者まで快適に暮らせるまちづくりを進めます。
- ・地震や水害などへの防災対策の充実とともに、通勤・通学における交通環境・防犯環境の整備により、安全・安心に暮らせるまちづくりを進めます。

●安全で安心な暮らしの確保

市民が安全で安心な暮らしができるよう、地震、火災や水害などの災害や防犯に対する安全性の向上を図るとともに、上・下水道などの生活基盤施設をはじめとした身近な供給処理施設の整備を進め、生活環境の改善と良質な住環境の形成を図ります。

●地域コミュニティの維持

人口減少・高齢化の進行や住宅地の拡散などにより、都市や地域での活動を支えるコミュニティの担い手が少なくなっています。教育や医療、福祉などのさまざまな分野と連携し、高齢者、子ども、及び障がい者の生活に配慮した生活環境の充実により、コミュニティの維持を図ります。

また、身近なみどりや公園の管理を市民と協働で進めるなど、地域コミュニティの形成につながる地域活動を支援していきます。

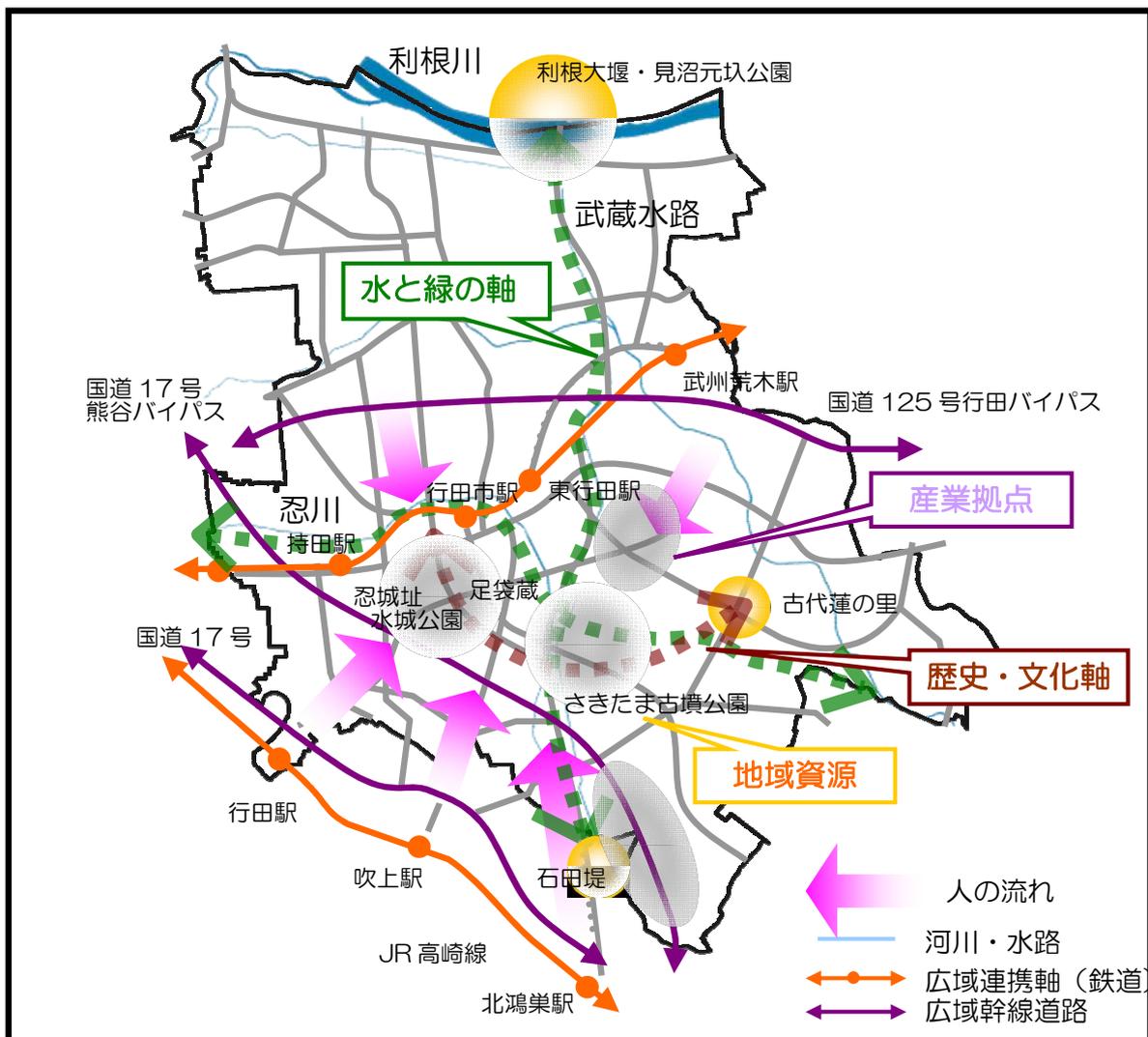
基本目標 3 笑顔あふれ、にぎわいを生むまち —にぎわいの創出—

都市機能の集約と地域資源の活用、土地利用の見直しにより、農業・商業・工業・観光のあらゆる分野で市民と来訪者の交流の拠点形成し、にぎわいと活力のあるまちづくりを進めます。

(まちづくりの視点)

- 農業・商業・工業・観光などの各分野で新たな雇用の場を確保し、生き活きと働き暮らせるまちづくりを進めます。
- 中心市街地では、地域資源を活用した賑わいを創出し、交流拠点として整備を進めるとともに、さきたま古墳公園などの豊富な地域資源とのネットワーク化を進めます。
- 広域交通網の充実や、新たな産業構造に対応可能な環境整備を進めるなど、産業が活発な活力のあるまちづくりを進めます。

【都市づくりのイメージ図】



目標-1 産業振興により雇用の場が確保され、生き活きと働き暮らせるまち

- ・ 低未利用地の活用や企業立地環境の整備、観光農業への展開により、農業・商業・工業・観光などの各分野に新たな雇用の場を確保し、生き活きと働き暮らせるまちづくりを進めます。

●時代の変化に対応した新たな産業の創出

今後の産業構造の変化を見据えて、情報・通信、エネルギー、リサイクルなどの新たな産業や研究開発機関などに対応可能な環境整備を進め、快適な産業活動の場となる「産業拠点」の創出を図ります。

●中心市街地のにぎわいの創出

中心市街地には日常生活における多様な機能と、忍城址や足袋蔵などの歴史資源による街並みを活かし、商業施設や観光施設を集積し、市民と来訪者の交流によるまちの賑わいの創出を図ります。

●土地利用の転換によるにぎわいとゆとりの創出

幹線道路の沿道やその周辺の土地利用を見直し、市民と来訪者による交流・にぎわいの場の創出や、都市生活圏においてゆとりのある魅力的な住宅地の創出を図ります。

目標-2 市民と来訪者の交流がにぎわいを生み、快適に過ごせるまち

- ・ 忍城址やさきたま古墳群などの豊富な地域資源を連結する、公共交通及び歩行者・自転車道ネットワークの充実や観光関連施設の整備により、来訪者が長時間滞在でき快適に過ごせるまちづくりを進めます。

●歴史・文化・自然資源を活かした観光産業の振興

来訪者を惹きつける様々な地域資源の魅力を生かし、観光政策と連携して観光産業の振興を図り、忍城址、さきたま古墳公園、古代蓮の里をつなぐ「歴史・文化軸」をはじめとする、地域資源のネットワーク化を進めます。また、市民と来訪者との交流機会の拡大により、一過性の交流から参加型・体験型の交流への転換を図ります。

●都市拠点や地域資源へのアクセスの強化

市内循環バスルートの見直しや公共交通手段の充実により、来訪者の玄関口となるJR行田駅、JR吹上駅、及び秩父鉄道行田市駅から地域資源のネットワークへのアクセス強化を図ります。

目標-3 地域産業が活発な活力のあるまち

- ・ 他都市を結ぶ広域幹線道路ネットワークの充実や、豊富な水資源を活用したエネルギー産業など、新たな産業構造に対応した環境整備を進め、地域に根付いた農業・商業・工業・観光などの産業が活発なまちづくりを進めます。

●地域に根ざした産業の創出

既存の地域資源を活用した産業振興を図る一方で、観光農業や本市特有の食文化による新たな産業展開など、多様化する都市及び地域へのニーズに対応可能な、地域に根ざした新たな地域産業の発掘・育成・強化を図ります。

●都市拠点や地域資源へのアクセスの強化

高速道路のインターチェンジにアクセスする広域幹線道路整備や鉄道輸送機能の強化を進め、農業・商業・工業・観光の新たな産業に対応可能な都市基盤整備を進めます。

基本目標 4 みんなでつくる協働のまち -協働・連携によるまちづくりの推進-

市民、民間事業者、行政機関のそれぞれが、構想段階から事業化段階まで継続して、主体的にまちづくりに関わっていくことができる体制を構築し、協働によるまちづくりを推進します。

(まちづくりの視点)

- まちづくりの構想や計画の段階から市民が参加しやすく、主体的な取り組みが継続的に行なわれるような仕組みづくりを進めます。
- それぞれの地域コミュニティにおいて身近なまちづくり活動を活発化して、市民一人ひとりが本市の目指す将来像を共有し、愛着と誇りを持って住み続けられるまちづくりを進めます。

目標-1 市民・民間事業者・行政機関等が相互に連携し、 それぞれが主体性を持って活躍できるまち

- ・ 市民、高次教育施設、民間事業者、行政機関等が相互に連携し、活躍できる都市づくりの取組体制が確立されたまちづくりを進めます。

●市民参加によるまちづくりの推進

立場や世代の異なる市民の様々な意見やニーズをまちづくりに反映するために、市民が気軽にまちづくりの構想や計画の段階から気軽に参加できるような、情報発信や参加の仕組みづくりを進めます。

●多様な主体から構成されるまちづくり推進体制の構築

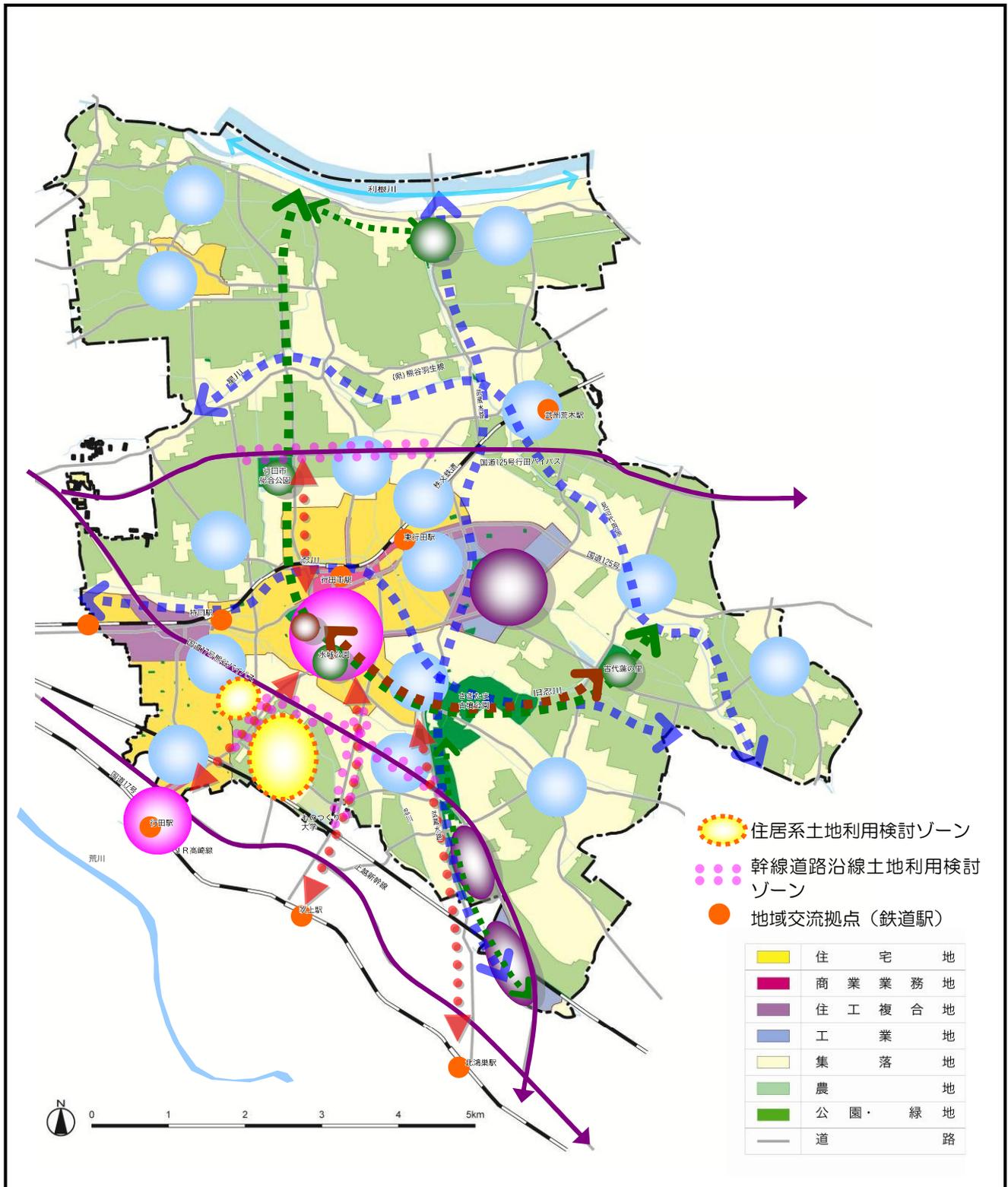
行政だけではなく、市民団体や高次教育施設、民間事業者が連携して、まちづくりの進め方を多角的に検討し、実現に向けた役割分担ができる、まちづくりの推進体制の構築を図ります。

●まちづくりの担い手の育成

子どもからお年寄りまで、市民一人ひとりがそれぞれの地域コミュニティで環境美化や防災など身近なまちづくり活動に参加し、本市での暮らしを楽しみ、愛着と誇りを持って住み続けていけるようなまちづくりを進めます。

3-4 将来の都市構造

「水と緑と歴史を活かした環境負荷の少ない集約連携型の都市」を実現するための4つの基本目標に基づき、市全体の将来の都市構造を次のように設定します。将来人口フレームにふさわしい土地利用の実現に向けて、多様な都市機能の集約を図り、あわせて公共交通などのネットワーク機能を強化し、環境負荷の小さな集約連携型の都市構造の実現を図ります。



都市構造の要素	
生活圏	<p>「都市生活圏」と「地域生活圏」で都市機能の役割を分担し、それぞれの暮らしの質の向上を図るとともに、産業の活性化に向けた土地利用の見直しにより、まちの活力を創出する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・都市生活圏：中心市街地の外側に広がる既成市街地で、主に市街化区域のエリア ・地域生活圏：主に市街化調整区域で、都市生活圏をとりまく周辺のエリア
拠点	<p> 都市拠点（中心市街地）</p> <p>：「まちの顔」である中心市街地には、商店街や秩父鉄道行田市駅、市役所などの公共施設、忍城址などの歴史資源、市民の憩いの場である水城公園に加え、商業、医療、福祉、教育など様々な都市機能を集約する。</p>
	<p> 都市拠点（JR行田駅周辺）</p> <p>：「おもてなしの発着点」であるJR行田駅周辺は、通勤・通学はもとより市内外の交流・交通の要衝として、都市機能の充実を図り、商業施設、子育て支援・サービス施設などの生活支援機能施設を誘導し、利便性や質の高い住宅地の充実を図る。</p>
	<p> 産業拠点</p> <p>：既存の工業団地や業務施設を集積する工業系市街地においては、多様な産業に対応可能な環境整備を進める。また、情報・通信、エネルギー、リサイクルなどの新たな産業や研究開発機関など、産業の高度化に対応した立地を確保するため、土地利用の見直しや都市施設などの環境整備を図る。</p>
	<p> 農村集落地</p> <p>：「農村集落地」においては、自然や田園などの周辺環境と調和を図り、都市基盤の整備を進め、地域コミュニティを維持し、快適でゆとりある生活環境の創出を図る。</p>
軸・ネットワーク	<p> 水と緑のネットワーク</p> <p>：主要な河川や水路を活用し、緑の骨格を形成する忍城址・水城公園・さきたま古墳公園・古代蓮の里などのさまざまな地域資源のつながりで形成した、行田らしさを創出するネットワークの形成を図る。</p>
	<p> 歴史・文化軸</p> <p>：忍城址・足袋蔵・さきたま古墳公園・古代蓮の里をつなぎ、にぎわいの創出を図る軸。</p>
	<p> 広域連携ネットワーク（鉄道・道路）</p> <p>：広域的な都市間連携や交流を促進する鉄道・道路による広域交通ネットワーク。</p> <p> 幹線道路・公共交通ネットワーク</p> <p>：近隣市を結ぶ広域交通を担う県道や、都市拠点と農村地域間などを結ぶ主要な幹線市道など、生活環境の利便性の向上と地域間の交流を促進するための道路ネットワーク。</p>
	<p> アクセス強化軸</p> <p>：都市機能を高めるため、交通結節点である鉄道駅や広域幹線道路から、都市拠点へのアクセスを強化する軸。</p>

